
Last Shooting

アザゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L a s t S h o o t i n g

【Nコード】

N 8 5 5 4 G

【作者名】

アザゼル

【あらすじ】

とある世界のとある場所：世界は廃れ、滅びようとしていた…そんな世界と俺と相棒のちっぽけで刹那の物語。

（前書き）

戦争モノのバッドエンドモノなんでお嫌いな方はご注意ください

少し昔話をしようと思う。

世界が戦争なんてバカをやり始めだしてしばらくたった頃だった。

戦争をすれば当然人が死ぬ

そうやって戦える大人が居なくなったらどうなるか……

この時、暢気に『戦争が終わる』なんて考えた人間は戦場を知らないお偉いさんかはたまた戦争を知らない子供に違いない

残念ながら世界はそんなに単純には出来ちゃいない

そうなれば答えは簡単だ。

『大人』が居なくなっただのなら『子供』を使えば良いだけのことだ……簡単だろ？

そんな時だった俺と相棒が出会ったのは……

相棒はついこないだまで高校生とかいうのをやってたらしい。

そんな弱っちくてここに来るまで虫も殺せなかった人間の相棒にも世間の風は容赦なく襲いかかった。

悲しかな世界の過ちってやつに付き合わされるハメになったって訳だ。

だが、人つてものは恐ろしく順応性が高く一ヶ月も過ぎてしまえば虫も殺せなかった純粋な少年なんてものはキレイさっぱり消え去っていた。

相棒も無事汚れた大人の仲間入りを果たす事が出来たって事だな。

そうして数ヶ月が過ぎたある日の事だ。

その日はバケツをひっくり返したかのような勢いで雨の降る鬱陶しい日だった気がする。

相棒はいつものように廃墟になったマンションの一室で息を殺しひたすらに獲物がかかるのを待っていた。

こんな時相棒は決まって独り言の様に同じ事を口にするのだった

『何で俺たちはここまで生き残ってこれたのだろうか』ってな

確かに何で俺たちなんだろうかとは俺も思う。

腕のいい奴だったら俺たちの他にも山のようにいたし、生きたいと足掻いていた奴だって山のようにいた。

だけどそういう奴に限って真っ先に死んでいくのだった。

『因果な人生だよな…』相棒のその言葉に俺も心から同意しておくそうしてそんな話を話す内に日も暮れ出し、今日は珍しく獲物がかからなかったな…

なんて思っていたその時…

俺たちのいる部屋のドアが突然開きそこから人が入って来たのだった…

それはまだあどけなさが残る子供だった…

それこそ、ここにいる相棒なんかよりも2〜3歳年下の少女。

もちろんその少女が俺たちの味方な訳がなく、動揺していた相棒に反射的に手元の凶器の引き金を引いたのだった…

それは多分彼女の意味ではなく、本能的な自己防衛の為だったのだろう。

引き金を引いた手は寒くもないのにガタガタと震え、瞳には涙が溜まり頼へと流れ落ちていた。

そうして相棒を撃った後、その少女は相棒の安否も確認せずに逃げるように消えて行った…

彼女は始めて人を撃ったのだらうと俺は思った。

まあ今の俺たちにとって関係ないことだらう

それに俺は相棒に1つ聞きたいことがあった…

それは「なぜあの少女に撃たれる前に撃ち返さなかったのか」だ。

いくら不意を突かれたとはいえ相手は見た所軍人でもないただの少女だ。

反撃をする隙ぐらい充分にあっただはずだ…

だがそれを相棒はしなかった…

俺にはそれがどうしても疑問に残ったのだった。

そんな俺の言葉を聞いた相棒は『さっきの女の子が妹に見えた』と

笑いながら抜かしやがった。

俺は「つまんね〜理由で死ねなよシスコン野郎」とだけ言っておいた…

相棒は『全くだな…あはは』とのんきに笑っていた…

そんな様子を見た俺もなんだか笑いが込み上げてきて気付くと二人で笑い合っていた…

その様はまさに異常の一言で簡単に片付くようだった。

しばらく笑い合っていた俺たちだったがその笑い声がぱったり聞こえなくなっただけ、不意に『俺、やっぱり死ぬかな…』と相棒が口を開き、聞いてきたのだった…

その顔には口には決して出してはいないものの死の恐怖が滲み出ていた。

俺は戸惑いがあったが正直に「死ぬだろうな…多分」と真実を告げたのだった…

何せ相棒は体に数ヶ所に穴が空いているのだ。

ここがもつとまともな場所で今すぐ治療にとりかかっていたら助かっていたのかも知れない…

が、こんな戦場に医者がいるはずもなければ治療するのに十分な設備も当然ない…

つまり、助かる確率は万に一つもないということだった…

一瞬で楽に死にきれず命が少しずつ磨り減っていく絶望感と耐えようのない苦痛を感じながら相棒の生は着々と終わりへと向かっていくのだろう。

その前例を俺たちは多く見てきた
それも多く仲間で…

俺のその言葉を聞いた相棒は『そうだな…』と声を漏らした…

その声には何か決意のような、覚悟のようなものが宿っているように俺には聞こえたそう思った刹那。

相棒は血まみれの手で俺を握りしめ、最後の力を振り絞り自分の頭に添えたのだった…

そして……

相棒はそのまま俺の引き金を引いたのだった
何人もの人間を殺してきた引き金を…

俺は命令されるがまま弾丸を放った。

目標物は本来撃つべき敵ではなく自分の親友…

『じゃあな

おんぼろな旧式銃だったけどお前と一緒にいれてまあまあ楽しかったぜ』

そんな相棒の声が聞こえたような気がした…

相棒が死んだ後、俺はひたすら暇をしていた。

そりゃそうだろう、何せ使い手のいない兵器なんてただの鉄の塊にしか過ぎないのだから…

ここで相棒と共に朽ち果てる…
それも悪くないな…なんて思ってたんだぜ

あんたが現れるまではな

なああんた突然だが俺を拾っちゃあくれね〜か？？

.....

何故かって？？

何言ってるやがるそれはあんたが一番良く分かってるはずだぜ

だってそうだろ

あんたにだって多少なりとも責任ってのがあるんだぜ

何せあんたは俺の相棒をこんな脱け殻にしちまった原因を作った張本人じゃね〜か

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8554g/>

Last Shooting

2011年1月14日14時39分発行